急な改善が望まれます。

（3/1 読売朝刊解説面）

国産ロケット危機

2月17日に打ち上げ予定だった「H3　1号機」はやむなく打ち上げ中止に。その後3月7日に打ち上げられるも打ち上げから14分後搭載した衛星と共にフィリピン沖へ落下。失敗続きのH3は低価格の自動車用電子部品を転用するなどして費用を半分の50億円に抑えたと言います。こうしたコスト削減が品質に悪影響を及ぼしたとしたら残念だと。世界的に宇宙ビジネスは活発化しており新日本人宇宙飛行士に世界銀行職員の諏訪理さん、医師の米田あゆさんが合格したばかり。日本も早くスタートラインに立たねばますます世界との競争に乗り遅れることに。どうにか立て直してほしいものです。

ドラゴンへの階段　第㊼回（連載エッセイ版）

「道理を持つ、ということ」佐藤　洋祐

寒さ厳しき折、と書きだしたのは先月号、それが今は春盛りのような空気につつまれて、冬の朝とは違い、寝起きの顔を洗う水にキリリとした気持ちよさだけを感じます。急激に変化する地球環境への漠然とした不安と、生命力溢れる季節の到来への素直な歓びが、静かに心の中に入り交じっています。昨日で東日本大震災から12年が経ち、各地で偲ぶ会が催されたと聞きました。私はシニア合唱団「トゥーヤング」のメンバーと、佐倉市ユーカリが丘のイオンタウンにて歌を唄っていました。復興を応援するチャリティーソング、「花は咲く」の歌詞を噛みしめて唄うと、被災された方々の痛みが想われ涙が溢れます。日本各地でこのようなイベントが行われているという事実が、心に勇気を与えてくれます。音楽の前では自分がただ一人の人間、一つの生きものであるという安心感を覚えます。

こうして私のような者にも、心に映るそこはかとなき事を皆さまにお読みいただく有り難い機会に恵まれているのはこの上ない幸運ですが、その一方で、語らずとも粛々と歌、音楽を演奏していく、その営みの日々があっての私なのかな、と思いました。

【写真の説明】3月12日の読売新聞の記事「震災伝える歌とピアノ　佐倉」からの写真

「道理」というものを知り、語ることが好きな子供でした。中学生の頃には生徒会長を務めたことがあり、例えば、なぜ校則があり、それを守らなければいけないのか・・・というような道理をいつも考えていて、生徒総会などの場でそれを演説したりしていました。それはそれで本当に一生懸命でした。成人になり、車の運転を覚えると、どのような運転が良い運転でどのようなものが好ましくないか、自分なりの道理を持つようになり、それに則さない運転を見ると心を苛立たせました。それも私なりの善意から起きたことではあり、決して悪気ではなかったと思っています。ジャズという音楽に惹かれたのも、伝統があり、成立した歴史的背景があり、それを知ること、いわゆる「蘊蓄（うんちく）」する、ということが私の知性、マインドにぴったり来たのかも知れません。これは良い音楽、これはそうではない音楽、というものに縛られるようになっていたと思います。それらの経験、時間が間違っていた（いる）、無駄だった（である）、とは思いません。ただ、今はその道理を持ったその右目の他に、もうひとつの目、「道理はさまざま、人それぞれに、生き物全てそれぞれに異なった道理あり」、というものの見方をする自身の左目の存在にも気が付いただけの事かも知れませんが、それで心が波立ったり、争ったりすることが、少しですが（笑）減りまして、つまり心安らかです。私の場合は両目は最初から開いておらず、片方ずつしか開くことができなかったのです。左右どちらが先に開くかは、人によるでしょうし、最初から両目でものを見ることが出来る方もあるかも知れません。ただ、今は道理をもって人と争うことよりも、黙って音楽を演奏したいのです。音楽と共にあるその時に、自分がひとつの生きものであること、自分というものさえも無くて、世の中という大きな生きものの一つの細胞に過ぎないことを感じ、なんとも言えない温かな、幸せな安心した気持ちになれる、それだけのことなんです。

道理を語る者にもそれぞれの人生あり、語らぬにも人生あり。ただ音楽にことばはいらぬ、そして音楽もことばそのものである、と、相変わらず道理に思いを巡らせる春の日の机です。（2023年3月12日筆）

佐藤　洋祐（サトウ ヨウスケ）
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。